特別研修

月例研究会　議事録（　４　月）

２００７年度第　１　回

報告題名 農村環境評価における評価主体の価値観の役割に関する研究	
報告者 小山田晋	**日時 4月26日（木）**
（**所属分野**）環境経済学分野	**場所　第7講義室**
座長　平口嘉典	**議事録担当者 池田敦、紺野雄介**
出席者　長谷部、両角、米倉、冬木、川島、大鎌、石井、伊藤（房）、齋藤、渋谷、平口、鹿嶋、水沢、小山田、田中、池田、鈴木、西はし、飯塚、紺野、高嶋、デッフィ、村松（優）	

報告要旨

本報告では、環境評価における評価主体の価値観をキーワードとし、報告者が卒業論文・修士論文で行った二つの環境評価批判研究の関連性を示しつつ、環境評価における評価主体の価値観の役割を明確化することを目的とする。卒業論文で報告者は、評価主体の価値観の多様性は環境評価を無効にするという主張を行った。しかし、この主張は、環境評価という研究分野を全否定しており、しかも環境評価に対する代替案も提出していないため、環境問題に対してあまり生産的とは言えないものだった。そこで、修士論文では、価値観の多様性を識別する手法を作成することで、評価主体間で価値観の多様性のあり方がある程度等質的であるという条件があれば、環境評価は有効であるとして、環境評価の利用可能性を残す結論とした。これは、倫理学における「共通善」、つまり、「評価主体間で共通して好ましいもの」という概念を環境評価研究に応用したことによる結論である。このような、価値観をどのような視点からとらえるかによって、環境評価の有効性判断が大きく変化するメカニズムを、研究会で報告する。

質疑・応答

報告者：D1 小山田晋　　担当：M1 紺野雄介

平口：環境評価する側の価値観が多様であるということを問題視しているが、環境評価を行なう意義についてはどう考えているのか。

小山田：環境に対する施策の優先順位を合理的に決められるので、政策的に有用である。

平口：政策的利用のために環境評価が必要という立場ですね。

小山田：はい。

平口：政策的に環境評価を用いる場合、評価者の価値観に多元性があるということがどういう問題になるのか。多元性があるということを政策的に活かす意味はどういうものか。

小山田：「CVM」はいろいろと使われるが、価値観というものを考えたとき、「CVM」で出した値が意味を持たない場合もある。そこで、価値観の多元性をもってくると環境評価をできる場面とできない場面を区別でき、環境評価の利用を制限することができる。

長谷部：価値観の多様性と多元性の違いが分からない。価値観というのはひとつなのでは。

小山田：ここでは環境の捉え方がいろいろあるというのを多様性、環境を捉える軸がいろいろあるというのを多元性としている。評価の軸が複数あり、それぞれが大きさを持っているものと考える。

両角：多様性と多元性がうまくつながらないが、多様性の 2 のほうは、環境は評価できないという意味ではないかと感じた。

米倉：哲学倫理学としてやるなら、科学哲学までもどって問題を整理してみてはどうだろうか。

川島：価値観が多様であるということはそのようなものを行なっている人もそう思っていて、そこで出てきた値は平均値みたいなものであると思っている。

平口：環境評価で時間的に変化があるというのはどのように問題なのか。何か情報を与えてそこで大切と思ったり、不要と思ったりするのはどのように問題なのか。

小山田：評価の値に信頼性がなくなる。一回目と二回目の評価が違うということは、矛盾していることになりどっちを信用していいか分からなくなる。

長谷部：評価は CVM なら被験者、風景の中でなら現場の人、研究者というようにいろいろな人が行なうが、どれを対象にしているのか。被験者の評価は、研究者に分析枠組みがあるので研究者の評価枠組みに依存している。あと、本人の評価についての考察が抜けている。自分を問題にしていないということが問題では。もしこういうことをやっていくなら両極端になるが、原理的にやるか、政策に近づき影響を与えるような方向でやっていけばいいのでは。

伊藤：環境に対する価値観がぜんぜん違う人が同じ問題を同じテーブルで議論したようなものがあれば、そこからまた課題が見えてくるのでは。